





明治廿七年二月吉日

内山貞孝氏寄贈

特

ト 2
1897
14

門
號
卷

安政六年年

一

故多那少林

二

久義行文タトテ

三

叶地代主

四

家有り深矢不レノ

五

七

九

二月物、花め

六

八

二月物、花め

九

十

秋萬古はき

十一

中能ひる限を之れ

十二

新興有田領限

十三

支那所事所

十四

約多め之也

十五

新多め之也

十六

新多め之也

十七

新多め之也

十八

新多め之也

十九

新多め之也

二十

新多め之也

廿一

新多め之也

内藤
耻

印

十七 事足嘗身麻也也

十八 想前次之是望月序

十九 四月初日也也

二十 里役祀准首嘉次之酒

廿一 二月也後年也也

廿二 甲州志高ノ宿也也

廿三 奉之氣

廿四 各個降乃之也

廿五 西洋主病革也也

廿六 爲國人也也也也也

廿七 也後年附也也也

廿八 純萬衣也也也

廿九 日上

三十 純萬衣也也也

卅一 洋根ノ事也也

卅二 純萬衣也也也

卅三 主猶矣

卅四 簡(切取)一月也

卅五 純萬衣

卅六 九月也也也

卅七 事也四年也也

卅八 中御多ノ役也也也

卅九 純萬衣也也

四十 沖淡令也也

四一 事務出化并五也也

四二 沖淡令也也也

四三 民政殿の叙爵

四四 也也也也也

四五 也也也也也

四六 内内也也也

四九 正月之日の御行

安政六年正月

一 正月十二日八時より故郷持至

吉翁以竟

坐て御行所冲波立身にて。自然身見
作計にて将能寺郷代の相所を移す連因通
ゆるは行け候事とす。以上

正月

沙下ケル

坊山郷

事能持且之衣將致其而
石連不可乃
捨身以

正月十四日

以十二日涉丸、一月十四日處遇南歸、三月終乞
五禱之而十日不至、又三月廿日、四月上吉

正月十四日

返濟邦

正月廿二日以解占也

正月十四日

梅生子以

善年而元也連年有之、一歲而無也、雖文之相沿
之言、以謂五時地主也、之謂也、越以以上

正月十四日

梅生子以

返濟邦

正月十四日連年有之、一歲而無也、雖文之相沿

之言、以謂五時地主也、之謂也、越以以上

正月十四日

梅生子以

返濟邦

アラセキシテウツメタマニシテシテシテシテシテシテ

モタタタタ

アリサニ

アラセキシテウツメタマニシテシテシテシテシテシテ

モタタタタ

ミ

アラセキシテウツメタマニシテシテシテシテシテシテ

モタタタタ

アラセキシテウツメタマニシテシテシテシテシテシテ

モタタタタ

アラセキシテウツメタマニシテシテシテシテシテシテ
モタタタタ

モタタタタ

モタタタタ

モタタタタ

モタタタタ

水系

下

宿馬

連江

下

細中

下

對馬

下

至鹿野鹿野

之子於方

毛色

至鹿野鹿野
之子於方

有鹿野鹿野
之子於方
於方不肖

於方不肖

印子

至鹿野鹿野
之子於方

林子

行氣書

家
乞

林生之以松

而廣庭之草
之子秋方固

者生之草也。自中無源者病也。此也之
治也。此也之草也。此也之病也。此也之
多也。此也之病也。此也之病也。

此也之病也。此也之病也。此也之病也。
此也之病也。此也之病也。此也之病也。

此也之病也。此也之病也。此也之病也。
此也之病也。此也之病也。此也之病也。

正月廿二日

行氣

此也之病也。此也之病也。此也之病也。
此也之病也。此也之病也。此也之病也。
此也之病也。此也之病也。此也之病也。

正月廿二日

行氣

行氣
行氣
行氣
行氣

以義理上所傳列狀之多有不同者為會
之處故或亦云許而此子謂之之經尤
有深洞之言而大抵是似相合者無事
方之而大抵又不盡其指立於多寡也半
有半無之半半之半又半之半之半者以上

正月十六

西月十六

相和公極口傳而多有移或至物之名而
之多也要向以形名而至以形之形者而下
之多而下之多而上

正月十六

相和公傳

有馬等力

相和公傳——孝道家也

正政六年九月口傳而行

正月十六

既往後事年事和事而用生熟而知不
省之而後方之其亦不論而用而用
之亦知之後事後此叶多是也更之也
亦知而後事後此叶多是也更之也

右通之道之多之多相向而至之右格
或之多之多之多之多之多之多之多
後別後之通之多之多之多之多之多

右次句

右次句

-8

心多通之多之多之多之多之多之多
之多之多之多之多之多之多之多之多
之多之多之多之多之多之多之多之多

ニリナス

株式会社

本多周易

之記
乃済南人

志と和子後進不以て高才代をも誇る。喟せ
はくに對ひて終日憂愁の如く不樂を嘗め
す。因ては其の上

可り。ナシ。

右口蓮有中島文次り。義理をも叶へぬ而猶生方
地代をます。兩一ノ町主ひ。而ゆき。左ノ原

之記。中島文次

の状観

和子訓承續の。高町地代金。五年七月。六十二万。三
年。六千。三。五。百。三。十。二。万。三。三
之處。通。六。千。月。地。代。此。之。際。是。二。九。月。下。至。是
年。之。終。故。不。用。物。之。物。之。沒。則。之。御。之。下。於。往。
部。人。従。之。之。終。者。是。不。相。保。以。既。久。而。不。上

正月廿二日

於此那

竹生の手すりは

一金の旅立

事と和学傳後不承續あり。南洋にて去
日本上陸後是年夏至石垣島。去年七月
十二月と半年分食事修業の添て相處四年
其後不以不天額給。月之糧三日月割六ヶ月
食事修業無事終焉。是より三箇月後復其
所居に以上

文政六年七月廿二日

中島文清

六

一肩の手を遣す事の間下記

支糧の竟

移出は五歩半の所。總ての所を通到観
此切身の氣を多めに有する所。其の外並に事
候事の形を察知。所がアリ。別底ある所
ある。而して沙門寺の僧が其の所で作る。要は其の

以後事部主

二月廿九日

於以郎

未之形

清雨中亦切第之事

三月廿九日
未之家儀

以之斗之罪入

一前是支獨系源今後和子而之前年年之取相知
之至不平人報之深有此通款趣少而
無有信當年年之多也而年不平之多也

問南年年才年才為並切系清雨中亦未之也從
五來也往方之之務並增也往方之之務並增
都答所人枝枝去未之月分方上之而得所用

安政五年年十二月

葉子於之處
以之印

未度於未度

之重於未度

未度之通之使之未之相所以

以上

未之

林大夢院

苗二月もより承を又一日の御下相承 桂林君之印

諸事中春の候事

立原康山承合詔移文儀共

池之斗五升入

右是無也未春為候事謹此一高幸以也

猶如仲

慶改六年二月

立原康山詔次 那

至候於未幸也

之雲影方年之後

春事之通て多相波以上

林大夢院

七

一
正月晦日承合詔移文印同日之候事未幸
此報日也れて未幸處凡事多生之狀トテ恐往來
難堪江國未幸事トハ便には既ち今早止

正月晦日

詔次 那

八
一二月在吉川河上久留

今年の日めれ一月と二月は連り寒熱往
來凡此ノ事は物の外ニモ存へぬ事アリ此

假ウ御上六三上

二月十九

方舟船

一二月十九日御道

近江守

林大學院

此か

将军 宣下お聞か方舟が假御四行目御能

之見是物也

作手名も未だ不知テ此假ウ御上六三上

二月十九

一二月十九日御道立所御事無事御所上六三

秋葉子立所御事無事御所上六三

方舟登御門

山見立所御事

方舟登御門

何處達方舟

御用もつて書

金持勝之主

植木もとす

本の酒い

机

ちとくとくとくとく

土

三二月

だらか

一子せむる

ひかり

御用もつて書

將軍 宣下お聞く内役御門 神山口刻
列傳より 附とくらむあらそとくとく上
りゆう度どこの御とくを別紙より刻くわ
き音アノ目印紙、の御とくを別紙より
うるか此後ゆきて下り方とくを付

えくとく

二月せ

角馬を放ち廻らす事

三十六

行年 実年お高く又は根柢年もさうサ
ケ、又は根柢年と身の初り作成から行年也
奉る事同嫡子重すら承短詔同嫡子
平野三郎家元也あまく行善以行善大布
衣笠もお役人鳥示

自是之を承役人御令の事也かアノ正傳未

豊原西方先生の著書也 城山の根柢年もさ
くも根柢年と身の初り作成から行年也
行年も身の初り作成から行年也
行年も身の初り作成から行年也

一右のれいの國に奉る事也お元より奉る事
嫡子重すら承短詔同嫡子也 旗揚後既
元年も身の初り作成から行年也

旗揚後既元年も身の初り作成から行年也

也

かきこむとまじく

二月

一二月廿六日卯酉

和氣以

心事無事上以無事あらま就實^{アラマシ}之を云文
寫る人^{アヒト}にあらむ方根^{アラムカタ}根^{カタ}の
御^ミうふまき^ミを下^{アシ}の爲^{シテ}ての如^ク上^{アシ}

二月廿六

たけり

物語^{モノガタリ}三三三

心事無事上^{アラマシ}之^ノ事^ハ無事^{アラムシ}事^ハ有^{アリ}中^{アリ}度^ス
御^ミうふまき^ミを下^{アシ}の方^{カタ}根^{カタ}の御^ミうふまき^ミを下^{アシ}の爲^{シテ}ての如^ク上^{アシ}
御^ミうふまき^ミの爲^{シテ}て此段^{アラマシ}私^{アリ}私^{アリ}

一二月廿六日卯酉

たけり

物語^{モノガタリ}三三三

二月廿日
二月廿一

一
^{十四}
二月廿八日より遠

移りりり

移り

利根川通自作もさういふ事ある
あ連する病氣をかたる所改め此へまわ
不思議でちや脚不

三月六日

三月六日

吉良半十日摺詔

御身の病氣をかたる所改め此へまわ

不思議也

利根川通自作もさういふ事ある

三月

林大學生

方馬

支那居

林立學の様

吉川郎

ゆ別御と通宵努力の連夜の心を
こめて達成せました。病院も食事も
心配な事なく一日も二日も此般の活動が

見えて

三月六日

一三月七日

吉川郎

尚二月廿九日、周服部明平が亡き直須病
院にて同室の伊藤義久に入院した。伊藤は
多忙の身で、その間は吉川郎が看護を手
伝うてゐる。吉川郎は伊藤の死を嘆んで
呟く。吉川郎は「死んでしまふ」を口にし
てお床に近づき、頭を下げる。吉川郎は

あああああああ

吉川郎

三月

和物考

卷

一枝野羽盛 一

但表深青氣色綠白綃市寫紋之不細物用

裏地墨綠

細紗織草綠

一

但表地細絹引子織青緋

裏地白綠

一枝野羽盛 一

細紗本緋

細紗紅

一枝野羽盛 一

但表地細紗織青緋少舍牛緋

裏地細玉緋

一月入院中一

絵表地の火鳴

裏地の紗子絹

合子

右三通の文書上

三月前五之

行次郎

一月廿八日より是處に至り
ト

行次郎の事トあらかじめ言ひ度

一月廿八日より是處に至りト由道

行次郎

大字

今月は常連の月を度すのである
玉里は常連の月を度すのである
物トあきらむれども此處に至り
てはとく御坐りてお詫び此處に至り

三月十日

行次郎

大字

至頤公薨

私後不冷然矣之年事已高而夏中甚是急
相國一月以故也承公望

寄札 三月

近少郎

新之通足雲用承
先君所遺言于酒

大 二月十日聖朝勅旨六月十四日遣

以次第

林大學弘

生方滿四十日於評定不擇之間猶多病也
予憂之甚者恐其不能克盡所以別其母子
由酒之禁之詞書文尤多也病也甚也
也累文之以期於評定所擇之選即重
於此既中止之以上

三月十日

於公之期七時自多役結州中被麻上不服用
評定不中至之日以次第之書文至深不復可見

聖朝御用文書院
清光中月萬卷

左司員外郎司馬公上

毛氏通鑑

一

聖朝御用文書院

左司員外郎司馬公上

右司員外郎司馬公上

毛氏通鑑

聖文

聖清文

古今方言
毛氏通鑑

一 論傷寒之病者一門一門言之名五對

神乃以無心一味統言事

一 和學節而用之品並內外事物未復見化云一
切似有無事

一 和學節之後之考之從於之之所取與又非能
考之好也之考之先無目次而偏取以子考
之處於考之考之不考之底極學以之考之
一 跋々々々之謂也一門既知之則可也自今

以淺りゆき一門庶自是是亦遠古往古
考耳

一 以即感之和之考之考耳

大厚之能為一年一於均通孔志

四 異文

大厚之能為一年一於均通孔志

形體以十不於詳之無聲無形於根老子之通
之考之考之考之考之考之考之考之考之考之

ちとぞめのまをり事す。明印於詔三所
追上アセ。是又ちとぞの以上

三月四日

ちとぞの事。其身は後院内侍、不正而
は立所。其事の起るは御内親御御内家
所し。之を事の事。是の事。是の事。
礼兵内少佐。其事の起るは御内家主

事の事。是の事。是の事。是の事。

中事及ちとぞ八間のれ。是の事。是の事。

同様事の事

一々れそり。是の事。

中事。是の事。是の事。是の事。是の事。
是の事。是の事。是の事。是の事。

中事。是の事。

板井郎

一四月六日。是の事。是の事。

二月四日

手

異紋祀

塗骨塗灰

多不吉多品等何様に力のこらえよも
御りよしす。

文政元年四月十六日記

異紋祀、辛未ニ御家慶事判に奉行以後異文祀
定り事也。又家主は年の付銀は其後御く將
を用之也。扁額も後用龜甲一大龜甲遠文ニ居

之大サセナリ八條大相國被用此文一仍る尙家
用之也。又異文祀西園寺ハ長子唐主太終ちの龜
甲内院藤鞠侍自餘凡今不復惜近る可尋記
又異文祀ハ塵地うりうと想て多有清華并大臣
家主も亦通ひの定め有し。多有として有
物は後ハ近西院主脚踏立淨と曰ひ可取
之外も家主の定めありて異文の祀と之曰く傳
する矣文の祀ハ大臣以上よりて玉角不相成形

立教ノ圖書室

三方林寺社ノ出異文丁子唐草モ序文入とハ
修玉智仁御主

檢理林寺事多後事有松之色不尤

清代之林共清異文モ丁子唐草に多々見
文恭院林寺事多後事有松之色不尤
唐多々之清祠と門用之故大相國清祠
後ハ天子清祠後入と又日光り御起あくて

山川雪之涌之御清祠用之也多々御起
由狹之例山川之御度根度之御井度當
某後四年鹿州度至之御と之御
五年左之御者之御而御者之御五年再
波了ハ正親町之御家より御朱緑御家ハ正
七年御年と甲申之御文之祀若用是
尚也之御と甲申之御文之祀若用是
未久事如今文改メシ江主お御事の御起

角ニ周至多士大臣以上ノ官物ニシテ多用
用不相成事多々有也

一塗骨中砂ニモ一毫も官物ノ法半毛ノ如キ
行^ハと用^ハレ^ルノ所^ハ事^ハあ^リシ^ルノ如^ク行^ハ
及^ハ塗骨中砂ニモ一毫も官物ノ法半毛ノ如キ
行^ハと用^ハレ^ルノ所^ハ事^ハあ^リシ^ルノ如^ク行^ハ
又^ハ行^ハと用^ハレ^ルノ所^ハ事^ハあ^リシ^ルノ如^ク行^ハ
又^ハ行^ハと用^ハレ^ルノ所^ハ事^ハあ^リシ^ルノ如^ク行^ハ
又^ハ行^ハと用^ハレ^ルノ所^ハ事^ハあ^リシ^ルノ如^ク行^ハ

是れ端^ハノ用^ハ事^ハ多^シと^ハ思^ハシ^ム也

亦

公方様^ハ用^ハ事^ハ多^シ也

御代^ハ自^ハ有^ハ事^ハ行^ハ如^ク

文恭達^ハ御^ハ左^ハ府^ハ將^ハ日^ハ時^ハ移^ハて^ハ玉^ハ達^ハ
之^ハ中^ハ沙^ハ調^ハ追^ハお^ハ跡^ハ沙^ハ多^シ年^ハ多^シ年^ハ
の^ハ少^シと^ハ調^ハ追^ハ年^ハ少^シと^ハ御^ハ玉^ハ達^ハ少^シ
少^シと^ハ御^ハ中^ハ沙^ハ之^ハ沙^ハ多^シ年^ハ多^シ年^ハ多^シ

あすまことかくゆくひまくわくじゆく

うきよせ

お月

たか郎

一月廿二日後年立とて御名號

吉額

西夏の後年立とて御名號と通
御年上に同り御名號を立とて御名號
お跡此後吉額と上

詔

一月廿二日

たか郎

清雨中更爲後年立事

三月廿二日後年立

御年上

右是も尚未爲る御年立清雨中高宗也

仍如前

安政六年正月

たか郎

正月廿二日後年立

三月廿二日後年立

書書と通アシ相済以上

林子の次

一月廿七日阿波守連使仰取手カリアマセ也
上

大内郎及

菊屋ゆき

不経手筋の跡に此書名を通あま

所連印で有る以上

林子の次

一月廿七日

書子

甲州巨鹿郡東高村忠三郎と殺害をし候
あすみ同人奉手久手人相書

一年能沙務事

一文三五方

一升肉毛並半升方

一枚七ヶ頃二升五方

一月サ一細くすこまく方

一耳葉折

一鼻二三五方

一唇厚き方

一齒六七八九方

一月代百毛濃千方

一耳厚年方

一立舌年方

一鬚毛絆後之絆薄く切る方

一毛高き衣丸本綿角革細塵行被圓系方

筋行す縫絆馬一匹面細骨多片角之細毛

地に少禽麻言之ヒナガシ

右通しもの放者之色と云ふ而此毛の科

め代毛形極て短毛也此毛口出までう放以テ

山口丹羽方りてす出でる之の聞名之牛所

も一毛生じるを家集又そのふと多入の通称

五萬三主賜りお知りておも事也

五月

四月主をも也

万葉歌歌の歌主をも連う歌わす
とくまひきが多健歌有歌主にあら
萬葉歌歌の歌主をも連う歌わす

四月主

林大字歌歌

乃次郎

一月主

乃次郎

新草堂集

万葉歌歌の歌主をも連う歌わす
往來の頃あらゆるもよしの歌と歌文別成
萬葉歌歌の歌主をも連う歌わす

四月主

乃次郎

新草堂集

移居五島より後事多とあらすが此後まことに

空上

六月

お汝郎

右紙本の日記を以て記入

六月十日六國山あさせ

がく行乃

林大學院

正義方(院)高宗之西征役之君主を以て其方
の臣方をもれぬ相羽ノ高那通アリ西方

正義源氏は臣下を以て

六月十日

右紙本

林大學院

お汝郎

高宗之西征役之君主を以て其方の臣方をもれぬ
相羽ノ高那通アリ西方

六月十日

一
一
一
一
一
一

一
一
一
一
一
一

廿九日 那波風

因約之名

又徳勝上行多也未通并曉得
之再也也中止也以人深也也
此後未行也也以上

七月二十一

左の事は深野別所守一朝し今里は御用
御手取石五王

廿五

一
一
一
一
一
一

一
一
一
一
一
一

以上

七月二十一

西洋書籍之類之書之書之書之書

那波風

西洋書籍之類之書之書之書之書之書

仰生少室山中
用港之水去鴟不
至直宮內
東移之連上後不
平身不爲主政事
制
身也難
夢也之半
半也
書也難
身也難
者科云其生山

一七月廿八日
丁巳年夏
歲次甲子
歲次甲子
歲次甲子

卷之三

不共用通古別紙通
事公外事外事外事外事
事外事外事外事外事外事

七月廿日

別

林文忠公集

名國傳

支那
和洋海陸不

近江郎家

主人

支那和洋海陸不
近江郎家

七月

支那和洋海陸不
近江郎家

御上りの内とて

支那和洋海陸不
近江郎家

七月ナフ

近江

支那和洋海陸不
近江郎家

廿七

用経文

一月ナフ

一月ナフ

徳清を経て嘉禾の東北を走るも山より
下りて至る所は高き山地の爲めに障て云々

主

七月

別れ故なり

雨は晴れ月は朧月は朧あても紅葉も
翁の例へどもあれば

七月

是

一 あ月サニテ内屋事 五日

御臺石

内屋事はて御臺事はてなとあ

還門以後拂れうるま事

一 部屋供はてとてと玉毛松衣大坂布
衣ともせ紫木を序す長行又とてとす行
る年行はとて此が御す行を

置而後事皆一之相承也

カシ日サ宵日又日ノ内又不ニ相承

主法又主法二ノ方ノ事

以上

七月

右ノ正解布多建典以至四ノ月ニ至

一ノ七月ナリ前田達也以連下原所ノ御書

ナリ又其一ノ正解ハ開ク以上

乃翁不復御用の御公の書付字

外國人寺川義重連中之御書平手松井國

毛官之志也トモ主事御ニシテ御見御聞法

シキナリトモ名舟自船連中以合之致也

事も有リムケテ所丈程往々而扱其臣外

國主行ひて又おゆくもアシム事無事也トモ

ナリ通う事相承

七月

一十七月廿四日御のさ

ひより親

用人多者

以テ御壁上ノ御所ノ御板下傳御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御

七月廿四日

御御御御御御御御御御御御御御御御御

御御

往來又モ橋上ノ碑寺間有若斯
相觸ノ事也有若斯外國人市中守行
之處建寺以之モ之也相觸ノ事也
事也向來有若斯と云狀行道之有
之有若斯方多有相觸ノ事也有若斯
過處不相觸人也於猶割方之有
古之通て相觸ノ事

七月

一七月サモニ角り之を

一折り程

シテ紙砂上に於て其残りを定め

呪止上に於て其又之上

七月サモニ

別所

甲斐守處所アレハ此事行

四廿八

涅槃尼林の宝塔ウ供養ナシ申候
出所モ一月廿七日午後四時拘禁

七月サモニ

一八月吉日内附タモ

八月廿一日私裏リ作成ナシ先事ナシ
役員用テシお物アヘンアリモテナシ

一月吉日

八月五日

紫葉山有道院

四

一月の間夕しの事多忙と覺え
すが爲め上

ゆき

三

一月の間夕しの事多忙と覺え

ゆき

自來後は多處を往来するも還り以て
往々年々

一月の間夕しの事多忙と覺え
夜は多處を往来するも還り以て多忙
と覺え此かとす行先
墨門の後多忙である事多くなる
事あるに今す所おもろ徳の山城
宿泊する

二

七月

もとあらわ

めは年中お附りおまつせんのよきをひかへる

翁のよきお福

八月

服及ちおもてのゆふゆうす

大日

外國人入市中で外夷の内に市を立

之は確とおこなふべからず其後をナシス
之を平定する事無くしておぞと和
事多々おこなはれ翁のめ制を立てる所と
拘りの所とおこなひの所と五捕紅絆上
よりおれをアリキ清外國人立外市
國人人民の絆をおかし便に行え給ひ
難急に日本を立つてお母へんじゆきを立
亦年事もととたゞくてもう能くアリ

年

お風呂へ入る所までうつてお歸り

八月

一月十五日四時までお風呂へ入
り里子へ向ひて坐

田舎の事は嘗て未だ

此を洋服用に銀と金を銀座に販賣
併せ其の上身を銀元まで序でゆき

年

お風呂へ入る所

八月

一月十四日四時まで

ひびりて

用意した

お風呂へ入る所へゆくがお風呂へ入る
おまづけをもつてゆくのであるが、お風呂へ
ゆく所へゆくのであるが、お風呂へ入る

うれきをこころひそむよ

八月十四

中野大輔の御出でせり

也七月廿七日未明火船を川越宿町に
て候ひ候ふと知る所年へと教官ゆゑ
身をもつておおきく舟を多用す事不思
議恨フリツキ家入。紹興二年十一月
舟に詣る所舟には多用恨海ナシねまゆる

松入舟より水傷なる陽而こたへ

松原

一麻風吸

一ノ

すまゆ

一麻裏苦脛

片足

かきもとらぬあくまと運び難い事多々の
く有いはなじくと云ふうちあゆむ不
満をこもる也。

今度の科形は多様で、成程子孫のものある。

八月

アラモテアラル

アラモテアラル

一九月六日ノ御事

以テ紙被テシテ、主様由之シテ、相手奉事、
搬入シテ、其事、力能ム。

以上

九月六日

アラモテアラル

主様承九月六日

御事、主様御事、此事、此事、此事、

以上

九月

アラモテアラル

今日の礼事、不需、此事、此事、此事、此事、

一

四

治政六九年十月
九月廿二日

九月廿二日

吉川郎

廿七

一九月廿二日而切某
尚未今而切某
下葉相保之上行
頬之上

九月廿二日

吉川郎

吉川郎

吉川郎

清承ノキの切某
未合之宿

三三

廿二年十月

外
右是未而未冬乃の切某清承ノ
御内所

安政六年十月

林立子

吉川郎

吉川郎

吉川郎

書

表書三通てお預け以上

林大手手記

一九月廿八日付

お詫び申

用段おほひ名

別紙御中多種の酒水の書付等を送る
アムモニタノ酒水を御は御船に於て貰ふ
此後うなぎもお手引と申す以上

九月十六日

別紙

御中多種の書付等

年々十九日

三吉林清之助

萬代守月以出候、而、御年月甘行志同同
御守御の役屋へ下さ

但稀守御サヘモトモ移終此月度々申中也
以文多立在候アリ、五個玉毛と申すも

一

稀詮院を中へ入る九月度の移成二門
多々おもな出仕の事より於所とてうらまく

九月十九日

一九月十九日松永傳ハシタキ

近江郡内

林氏御

主徳也近處之御を許み出で移
主徳出で居、相親のまゝ通ひ及く
名は源國の所居にまことに

九月十九日

此度かづてきあを抜一歩かくと向細井家
主も當日出仕すち時から生れ出仕となり
主徳もその日既出仕すりも生れ書をとる
生れ主もこの間おまめ未用をさへ出仕
主徳もこの日既出仕すりも生れ主も以上

十九日

林氏御傳

一

近江郡

一

主教也役成と申れどもかはま致ひ候
既に作成を下す萬事通じてと申御
主教は序文へ此の事と下さる事無く候
主教は此役を終了する所不至

九月廿二日

主教も主教も御内閣にて生徒等がう
経とて有りがむかは役を勤り貢奉れ
此の事は行司も之つをもす事無く上

一九月廿二日主教も主教

一
主教

林政郎

御達令は 作成を主に主元先生と申り御内閣
問合處を取るて施主様及方より百四十二万五萬
駁車自支修用であるて 勘定書を申上

九月廿二日

主教も主教も御内閣にて生徒等がう

四五

十月之日王在北門王在北門之次也入酒史酒器
之属如豆等之属之属如豆等之属于十月初吉

先礼

占事不吉名不正

百馬吉日庚

半宿
黎薄薄不晦
既以郎

玄衣玄衣者玄色之衣也以上

五十日吉

四六

之日王在北門王在北門之次也入酒史酒器
之属如豆等之属之属如豆等之属于十月初吉

九月之日王在北門王在北門之次也入酒史酒器
之属如豆等之属之属如豆等之属于十月初吉

百穀之宜

尚友之物尚友之物者尚友之物者尚友之物
至哉至哉者尚友之物者尚友之物者

猶上之上

十月七日

お汝郎

一十月日め被る方の胸下承圖事ゆく

寺教院

苟未十一月日め被る方の形衆別底通九號
方合主成号と同則處法書此五重表漏
主事と同沙國名を承至御事と於上空

十月

近教院

月日め被る方の事

年余士斗之承也

但事也

其是未當未十一月大之多情九月延至也

仍ノ所

安政元年十月

主事之承也

又承也

春之通て有か承不以承主事承承承
承不有承助主所承承通承主事判

セシム以上

松園書院

四三
一十九月丁酉の宵より起 疎々ナリニ日

ひはり鳥

林氏致

鶴馬を爲ゆる事多有すおもとてうらで此を

乞乞望

十月十九

ひよし

御前丸奉上

三方林西丸

御方退ひゆく事明十九日うぬ御後便西丸
方へゆる 西丸ノ前うねセ 城下

此病年幼ツニ角ニ持致以月為モ多シ以段
左ノ傳也之あ向く玉圓丸色之而未免丸

うね多納

不適うちあ無

十月

墨田多限經年

一十九月廿二日雨中

日晴天子有之日

——乃——

林風初

御前丸美至て良多限經機生の事尚生年時をも
久候御了自身手平實渡河まよおきひらと元亨
多限經海而生歲附主之役て又て主多限經
附主主也

二十月廿二日

ちゆきかわさく清りぬりもと無て草引がまも

四五
氏経用の叙文
多限經冊之今後管上人主修育之里人

一一二月廿二日

林風初

独多限之主官給 古也

城均 久遠教爵

作有向通大學改名而改名均 独多限此既
之成總此之主之主

十二月十六日

三月十九日

一ノ一泊

林光慶の次

お達筆な手紙が来た。お達筆とつてお通じ

旅館のままで

三月十九日

四十七
おめでたし御内申あらわす

おはな那田君

お政の郎

一ノ二月十九日

お委嘱政の郎成程年以前おまことに御承
虚筋おもて所の事に就て、年々おまことに御承
不甲斐萬事如また御承仕合ひを上へ
至

至

四十七
一ノ二月十九日

おはな那

一ノ一泊

林光慶

おまきおまきおまき同様初おせんとうおおゆく

五

以後ヲ莫々以上

三月十九日

四十九日後
一月十九日
氣死而死

和舊明言之有此無彼也下處是痛失其禮

上右上

三月十九日

方始耶

